

就業に活かすための専門学校美術教育プログラムの開発
保育士及び幼稚園教諭養成校における美術教育の実践的研究

長澤智広

日本は今、過去に類をみない少子高齢化社会である。保育士及び幼稚園教諭は、そこで大切にされるべき幼児を育成する国家資格として認定され、両資格取得者の人材育成が急務となっている。その分野の教育課程に美術教育を取り入れ、平面制作と立体制作の相互スパイラル運動効果が目論まれたカリキュラムを、方法論的仮説として提案し実践する。その教育効果が、完成作品と学生からのアンケート調査に基づいて分析されることで、題材及びカリキュラム価値に対する評価指標を確認する。その観点から当面のカリキュラムにフィードバックし、その中身としての題材を新規開発、一部修正したり配列を変えたりする。

昨今の若者は100円ショップで、たやすく生活用品が手に入る時代に生きている。そのため彼らは実用性の造形（工芸・工作などの応用美術）に興味・関心や、リアリティ感を抱けない表現活動をする傾向にある。そうした現状を脱む限り、学習領域はこれまでのように芸術学的知見に依存したまま、安直にも「純粋美術」と「応用美術」に二分するわけにはいかない。本研究では現代社会の中に生きる学生と、そこで営まれる美術教育の実態を重視するという観点から、学習内容を教育課程論的な仮説として「平面教材群」と、「立体教材群」に大きく分けてカリキュラムを設定する。

それらの教材群を保育士及び幼稚園教諭養成課程が置かれた、専修学校（これより専門学校と呼ぶ）の各学年で実践し教育効果を分析する。保育福祉科の専門分野に美術教育を取り入れることで、その就業に対してどのように有効に働くのかを検証する。日本の美術教育は制度的公教育機関にあって授業時数が減少し続けているが、そうした逆風の中で就業教育の立場から、改めてその必要性和重要性を究明しようとする。

本研究ではこれからの少子高齢化社会で活躍するべく、保育士及び幼稚園教諭の育成を目的とした美術教育カリキュラムの有効性と、改善点を実践的に検証した。各題材における学生作品と、アンケート調査をもとに分析を行った結果、題材の有意義度、題材配列における平面制作と立体制作の相互関連性及び協働性という、カリキュラム的価値に対する評価指標に着目した。その観点からカリキュラムにフィードバックして、一部題材を新規に考案しこれまでの題材と入れ替えるとともに、制作条件を中心に題材を部分的に修正した。

本カリキュラムはとくに主題表現力を効率よく学べることで、学生の造形表現への興味・関心が向上し、就業現場での実践意欲につながる事が明らかにされた。この結果によって、美術教育が就業に活かされることの証明となり、美術教育の新たな可能性として示すことができた。

今回は、保育士及び幼稚園教諭の養成課程における実証研究であったが、今後はさらに別の就業課程の場合も射程に入っていく。たとえば現在まで美術教育と全く交わることがなかった、異分野での実証研究などがあげられる。それらに効果が認められれば、美術教育が今後に向かうべき新しい方向性が見えてくる。そしてその方向が正しければ、改めて就業を見据えた人材育成と生涯教育の観点から、美術教育の重要性が見直されるときが

必ずやってくるに違いない。